

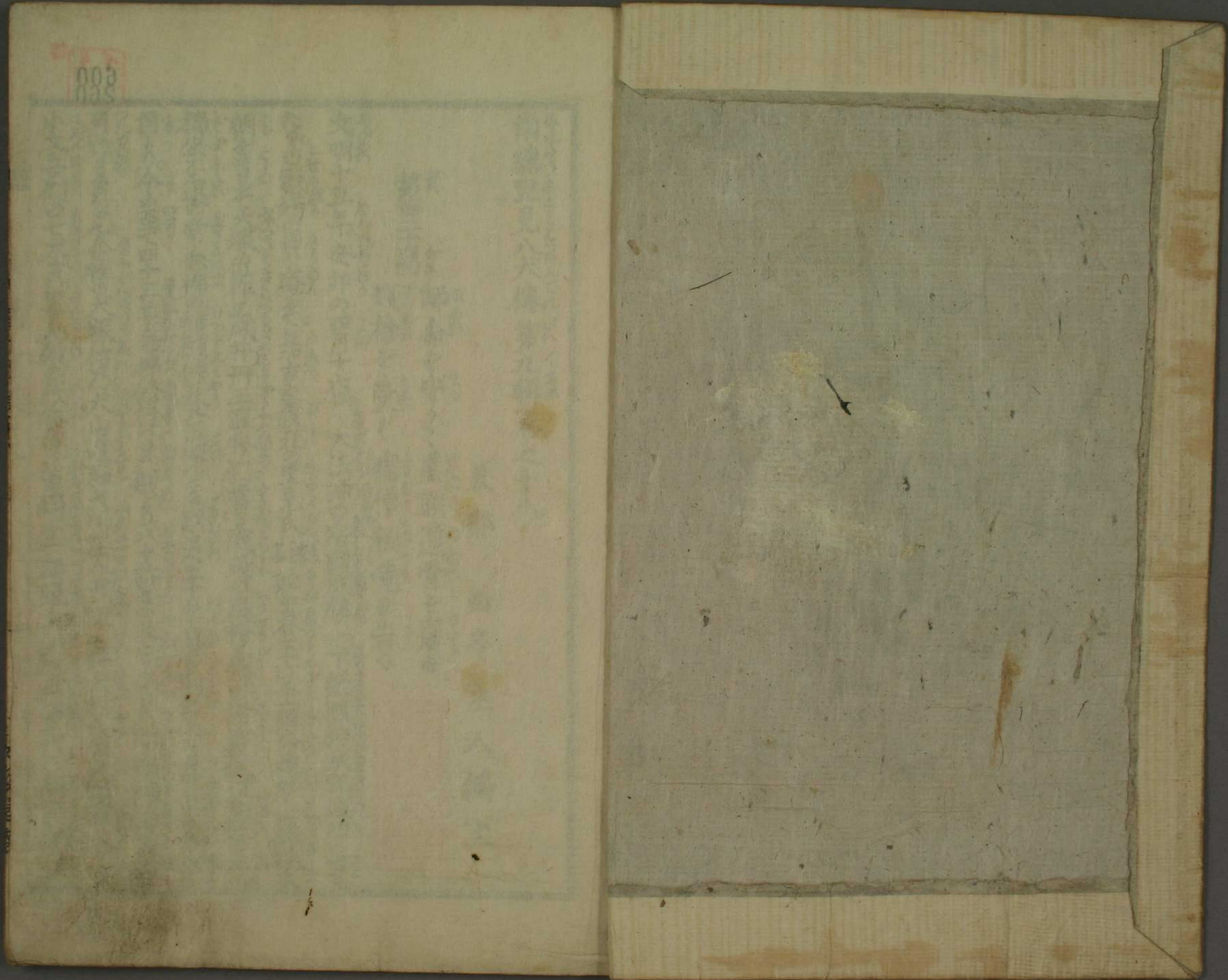


里見八犬傳 第九輯 卷十八

僧 4
600
260



003
833



600
260

南總里見八犬傳第九輯卷之十八

東都 曲亭 主人 編次

第三百十四回 師命を守りて星額遺骨を齋せ
殘捨を受く瘡僧福鬼を告ぐ



文明十五年癸卯の四月十六日、大法師の宿願成就して下総國結城郡城西と云
たる古戦場の草庵にて嘉吉の義死の里見氏降、妙春王安王兩公連城主結城氏
朝を首として大塚匠作三成井丹三直秀們當日戦歿の忠將義士の諸靈魂の菩提の與
獨坐不退の常念佛の結願供養を遂ぐと志す。是年五年忌の前修にて嘉吉元年辛
酉より今に至りて四十三年念佛修行の其創より八十許日及ぶる本日の即那諸將士の祥
月亡日とせん。今程大塚信乃大山道節大川莊介大坂毛野大村大角大飼現八犬田
小文吾們的七犬士の里見殿の代香使蟹崎十一郎照文副使蛸雪代四郎與保と共

八犬傳九輯卷之十八

東都 曲亭 主人 編次

婦幼の與假名をすてて、婦幼の與假名をすてて 作者の本、作者の本 夫四恩必報、夫四恩必報 狼獾の不仁を、狼獾の不仁を 時々と
 天を祀り、天を祀り 離鴉の悪食をも、離鴉の悪食をも 猶反哺の孝を、猶反哺の孝を 猶人への徳を、猶人への徳を 思ふに、思ふに 報へ
 心る禽獸、心る禽獸 易を及ん、易を及ん 伏して、伏して 惟れ、惟れ 嘉吉の擾亂、嘉吉の擾亂 君臣相克、君臣相克 五常地、五常地 拂て、拂て 人心
 猛獸と異るを、猛獸と異るを 是時、是時 獨結城氏の、獨結城氏の 艱忠、艱忠 是を、是を 左祖、左祖 義を、義を 仗る所の、仗る所の 雄兵
 遂に、遂に 亦、亦 其、其 目、目 負、負 の、の 諸將、諸將 恩顧、恩顧 の、の 勇士、勇士 故、故 君、君 兩、兩 公子、公子 の、の 奉、奉 為、為 妻、妻 子、子 と、と 忘、忘 れ、れ 性、性 命、命 を、を
 擲ち、擲ち 甲、甲 兵、兵 孤、孤 城、城 の、の 據、據 る、る 處、處 を、を 慮、慮 し、し 十、十 萬、萬 有、有 餘、餘 人、人 四、四 門、門 の、の 防、防 御、御 矢、矢 石、石 富、富 工、工 畧、畧 六、六 韜、韜 計、計 拙
 か、か 芝、芝 菟、菟 城、城 既、既 三、三 今、今 年、年 の、の 久、久 一、一 終、終 一、一 堪、堪 て、て 百、百 萬、萬 虎、虎 狼、狼 の、の 勁、勁 敵、敵 も、も 其、其 勢、勢 以、以 不、不 棄、棄 る、る 能、能 け
 ぞ、ぞ 雖、雖 然、然 古、古 語、語 不、不 云、云 乎、乎 人、人 身、身 一、一 天、天 不、不 勝、勝 天、天 定、定 り、り て、て 人、人 不、不 勝、勝 の、の 時、時 至、至 ず、ず ね、ね ば、ば 折、折 れ
 勢、勢 力、力 弱、弱 る、る 所、所 君、君 辱、辱 れ、れ 臣、臣 死、死 せ、せ 玉、玉 石、石 共、共 斃、斃 せ、せ 誰、誰 一、一 人、人 も、も 残、残 る、る 所、所 義、義 実、実 不、不 肖、肖 中、中 昔、昔 時、時 父、父 と、と 俱、俱 其、其 城、城 在、在 り、り 城、城 陷、陷 る、る 日、日 遺、遺 訓、訓 辭、辭 不、不 改、改 る、る 銳、銳 鋒、鋒 不、不 磨、磨 滅、滅 せ、せ 破、破 の、の 命、命 と、と 東、東 南、南 の、の 海、海 隅、隅 を、を 免、免 れ、れ て、て 神、神 餘、餘 を、を 與、與 通、通 臣、臣 を、を 誅、誅 戮、戮 し、し 且、且 不、不 義、義 の、の 兩、兩 郡、郡 司、司 麻、麻 呂

安西を討夷、安西を討夷 安房の四郡を有、安房の四郡を有 以、以 來、來 民、民 と、と 拊、拊 る、る 仁、仁 を、を 以、以 士、士 と、と 招、招 賢、賢 と、と 擇
 加、加 之、之 愚、愚 息、息 義、義 成、成 孝、孝 不、不 及、及 且、且 武、武 畧、畧 あり、あり 是、是 を、を 以、以 下、下 風、風 不、不 立、立 武、武 士、士 十、十 餘、餘 城、城 遂、遂 不、不 隣
 國、國 二、二 總、總 と、と 并、并 一、一 方、方 の、の 藩、藩 屏、屏 是、是 併、併 先、先 考、考 威、威 靈、靈 の、の 守、守 る、る 所、所 祈、祈 祖、祖 先、先 の、の 餘、餘 徳、徳 不、不 依、依 る、る 者
 也、也 義、義 実、実 幸、幸 小、小 良、良 臣、臣 勇、勇 士、士 の、の 羽、羽 翼、翼 を、を 爲、爲 と、と あり、あり 創、創 より、より 遠、遠 不、不 考、考 妣、妣 兩、兩 其、其 の、の 靈、靈 魂、魂 を
 招、招 け、け ち、ち 廟、廟 墓、墓 を、を 平、平 群、群 の、の 大、大 山、山 寺、寺 不、不 建、建 立、立 春、春 秋、秋 の、の 祭、祭 祀、祀 忌、忌 辰、辰 の、の 追、追 薦、薦 敢、敢 怠、怠 慢
 今、今 也、也 雖、雖 今、今 也、也 戰、戰 世、世 割、割 据、据 の、の 列、列 國、國 隘、隘 處、處 を、を 不、不 横、横 づ、づ 車、車 馬、馬 を、を 遠、遠 不、不 致、致 せ、せ 不、不 由
 是、是 故、故 不、不 躬、躬 自、自 其、其 地、地 不、不 治、治 る、る 恩、恩 不、不 答、答 徳、徳 と、と 謝、謝 せ、せ 吊、吊 祭、祭 の、の 情、情 盡、盡 せ、せ 能、能 言、言 不
 舊、舊 臣、臣 二、二 世、世 の、の 忠、忠 良、良 金、金 碗、碗 入、入 道、道 大、大 木、木 の、の 恩、恩 を、を 棄、棄 ち、ち 爲、爲 不、不 入、入 り、り 寧、寧 平、平 恩、恩 不、不 報、報 せ、せ 思、思 欲、欲 一、一 勇、勇 猛、猛 精、精 進、進 五、五 戒、戒 を、を 具、具 足、足 且、且 塵、塵 世、世 不、不 染、染 着、着 錫、錫 を、を 飛、飛 一、一 嶮、嶮 岨、岨 と、と 踰、踰 越、越 一、一 枹、枹 數、數
 行、行 脚、脚 十、十 餘、餘 年、年 近、近 曾、曾 義、義 実、実 父、父 子、子 不、不 代、代 り、り 草、草 廬、廬 を、を 嘉、嘉 吉、吉 の、の 古、古 戰、戰 場、場 幽、幽 陰、陰 茂、茂 林、林 の、の 中、中 小、小 して、して 三、三 月、月 不、不 退、退 の、の 大、大 念、念 佛、佛 を、を 勤、勤 行、行 遙、遙 不、不 重、重 旨、旨 の、の 香、香 堂、堂 を、を 仰、仰 せ、せ 將、將 其、其 真、真 福、福 不、不 傳、傳 世、世 不、不 衰、衰 也、也

八代專正傳卷十八

二

文苑英華

きめ 薦んとま義美灰ふ之を聞々相懽て寝れど因茲涅槃經三部孟蘭盆經五部隨求陀羅尼三卷を捐寫し奉り使臣蛭崎照文等不吝して以供獻焼香の眞礼を仍りし呼佛弟子の功德廣大を量迷津慈航の資を爲す胸月真如虚かを其善念の投ま所上り有頂天の届さへく下り金輪際融通しく弥陀勢至觀音の三尊俱降臨し五五の諸菩薩天部善神肩を比て影向あり異香額郁とく金蓮葩と降し天外の音樂節奏の如る鳳簫龍笛睡蛇を管さる塵雲忽岫より起り鬘鬘をばらんとはるべし然らば則數萬の精靈必是之惡の火坑を長く脱離して受る無量壽の寶座遷り二十六天の仙室に向きと常寂光の樂邦遊人乃至一闍提普く八正道を赴かんと公事由を本願の大檀那前治部大輔里見義實朝臣安房守兼上總介里見義成朝臣代り奉り浄場修行の沙門大行香使臣蛭崎照文等敬白とを

誦し登時蛭崎照文の七犬士們不揖をり徐々身を起して塔婆の邊を找む程代四郎紀二六あるゆて安房より両侯の寄さるり經卷と香眞を両手に捧け相従ふり照文が身邊に措くと照文を承受合々塔前不具程代四郎と紀二六の舊の樹下へ退れけり然らば又照文の塔婆に朝に端坐して且石塔城仰て看る細工の精妙ひさうもあま第一の石壇あり義実王の先考妣夫妻の神主ありその傍水二斗を装る可る壺の網裏に容るありあは何若の東西を身を知るるの次の壇の左右の花を供へく水膊の水盤あり下壇に香爐あり塔の四方に樹枝あり四箇の楮幡を吊し楯て諸行を常是生滅法生滅々爲寂滅爲樂との涅槃經の四句の偈を寫し照文隨即懷より伽羅維一裏合々去茶く焼香あり額衝に并々黙禱し身より起り退り大塚信乃立替りて找寄り焼香を信乃が大塚大塚三成及外祖井直秀の忠勇義烈拔群よく

昔年結城落城の折戦役の誓ありありと大士の中。信乃を第一番の焼香忠達
 せける信乃ハ懐舊の涙と俱ハ再拜して。嗚呼信乃ハ道節莊介毛野
 大角現ハ小文吾門立替々々次第と追て拜し。詠れ照文ニ。此杖を以て代四郎
 と共侶ハ私の焼香を介程ハ。大法師ハ本処ハ退坐して。連のハ木魚をうち鳴り
 十個の衆徒と異口同調ハ念佛數百遍唱へ。聲清亮と澄見て。現寂滅
 為樂の偈句虚しく。思ひぬ者なきり。信而諸士の焼香果一ハ。大法師ハ
 衆僧と俱ハ唱名の聲を歇め。合掌して念を。南無帰依佛南無帰依法
 南無帰依僧三寶請誦。奉る。追薦真福の諸精靈故鎌倉の管領持氏朝
 臣の西公子。春王君安王君法號某院某大童子。唱。里見治部少輔源季基
 朝臣法號義烈院忠慈賢山大禪定門孺人鳥山氏貞心院慈德如峯大
 禪定尼當城の先主故下總判官結城氏朝朝臣法號某院某大居士春安

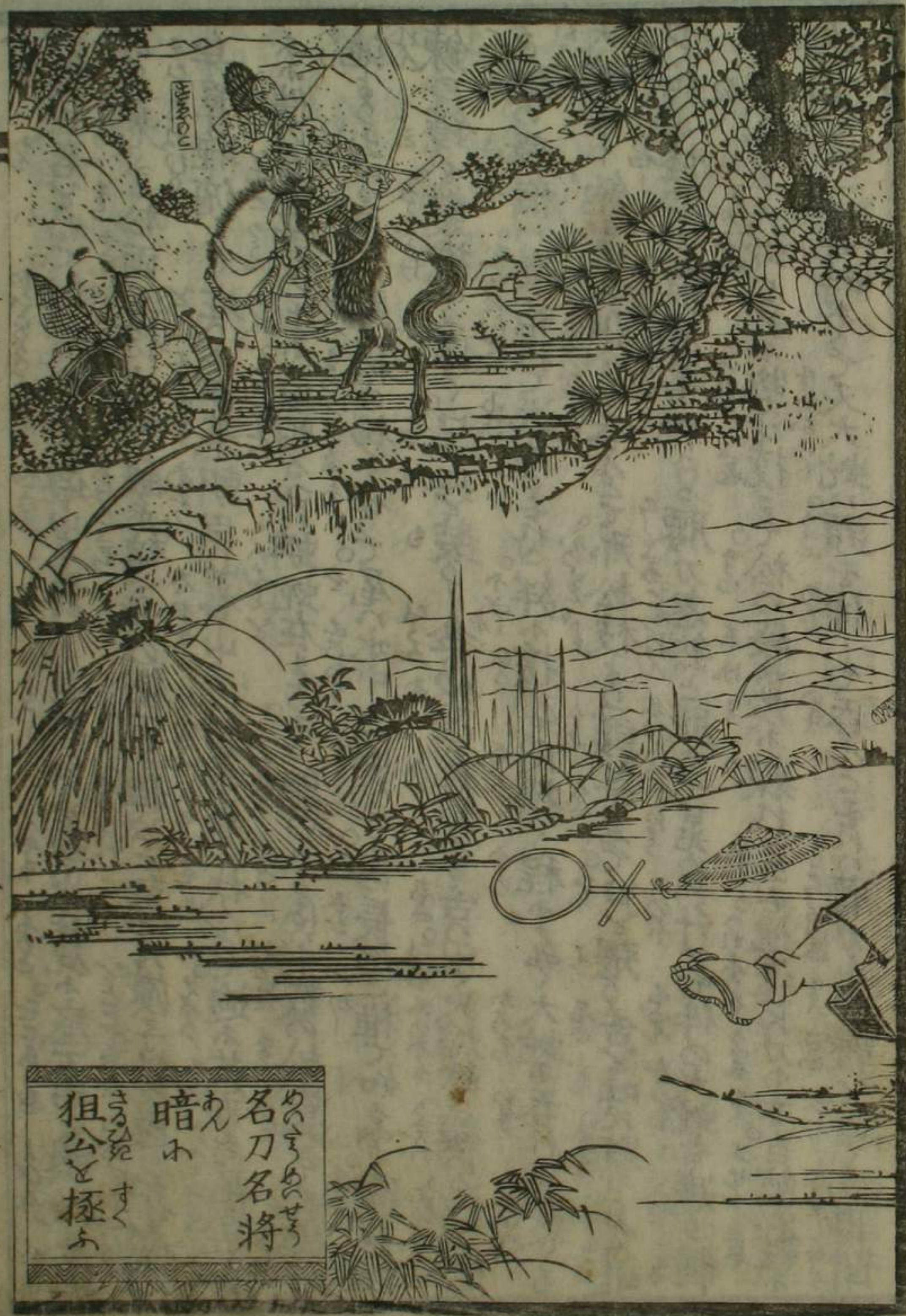
西公子の小傳。大塚匠作三戌法號訓山栄后遺誓禪定門夫妻其子大
 塚番作一戌法號知命達德速逝禪定門孺人藤原氏諱ハ東法號節
 標如竹似松禪定尼信濃國入氏井丹三藤原直秀法號當覺自證以
 真居士ハ它嘉吉の義兵忠戦陣役の列將士卒修まる攸の妙典及念佛の
 功德ハ依。一蓮托生永劫極樂土子孫後宋施主敏系昌南無阿弥陀佛南
 無阿弥陀佛十念詠。更ハ亦結願の偈を倡て曰。
 圓輪如輪歲月流。個中名利等浮漚。漫勞計較分吳楚。
 且任稱呼作馬牛。世事看來從理順。人謀怎似所天休。
 要知弔滅酬恩訣。念佛勤行成就秋。南無過去未來見
 在三世諸佛菩薩。唱詠ハ帮助の長老ハ亦偈句と誦して曰。
 願以此功德。莊嚴佛淨土。上報四重恩。下濟三途苦。

若者見聞者。悉發菩提心。盡此一報身。同坐極樂國。
 十方三世一切佛。諸佛菩薩摩訶薩。阿耨多羅三藐三菩提。
 唱訖。從僧都て低頭して供養。於是果あけり。登時庵主、大法師の拂
 子と合多身を起して。照文の坐邊に來て。西館より寄ぬ。經卷並の香奠の欵
 びを演るど。七犬士の口誼あり。却那壺と携て。幫助の長老師弟と俱。照文を
 誘引立てて。草庵へ退りけ。這庵極めて。陝け。十僧と一客の。這宅ハ膝と容る
 処。一の故。七犬士の縁頗。席と布して。肩と比て。俱坐。幫助の長老。對面して。欵びと
 舒る。獨大江親。紅衛。這小集。爾。送憾。且孝嗣と次。團大們的。嚙を。つあり
 け。程。照文ハ、大法師。今日。石塔。婆。具。措。れ。壺の。と。向。け。ふ。大。答。て。然。と。件。の
 一義。向。れ。と。疾。告。を。と。思。ひ。さ。る。も。暇。と。ゆ。さ。る。大。士。達。も。听。ぬ。と。ひ。つ。佛。壇。を。入
 か。り。て。那。壺。ハ。今。朝。這。長。老。の。推。來。て。贈。り。ぬ。先。君。季。基。朝。臣。の。送。骨。之。長。老。這。近

邊。能化院の住持也。法名の星額。先住宝珠和尚の法燈を續たぬ。よも
 今朝肇々。岐知ぬ。多。師父宝珠和尚。昔季基朝臣と方外の交りあり。を
 り。季基陣歿。多。折首級と。命。隱。て。亡。體。と。共。煙。不。做。ぬ。然。ど。思。ふ
 と。あ。れ。と。壺。不。藏。の。秘。措。は。後。々。も。葬。ら。せ。居。る。年。と。歷。て。宝。珠。和
 尚。遷。化。の。折。今。の。長。老。星。額。師。ハ。送。教。も。あ。り。季。基。主。の。朽。骨。ハ。今。那。人。の。後
 なる者。贈んと。思ふ。と。多。の。年。未。秘。措。は。是。よ。りの。後。年。の。序。癸。卯。丁。巳。比
 必。仍。脚。の。僧。有。て。姑。且。去。の。地。小。杖。を。歌。て。信。々。の。材。原。小。斧。を。締。ま。と。あ。り。ん。と。る。里
 見の舊臣。多。汝。情。地。小。我。意。と。告。て。件。の。送。骨。と。附。屬。せ。よ。然。ど。も。正。に。證。据。る
 く。疑。う。と。も。あ。り。ん。我。始。り。如。右。思。慮。ら。季。基。陣。歿。の。折。ま。も。隨。身。の。大。刀。一。口
 あり。と。送。骨。と。共。小。秘。置。置。け。祖。公。と。命。け。る。那。家。の。名。物。を。れ。岐。知。り。て。あ。り。ん。と
 ら。ん。汝。夫。の。名。を。よ。せ。と。叮。寧。小。送。託。せ。ら。れ。て。送。骨。の。壺。と。那。名。刀。と。合。ま。て。遞。與。

のひとを憐れ而今茲の春よりして拙僧の地不芥并を締めて常念佛を修めよ
 ける事情を多かる秋星額長老の御堂の徒弟達を相俱して我為
 石塔婆を一夜の間造り立て法會の莊嚴と補助あり今日も亦早旦より師
 弟共侶の這里の來まで始り件の來意を示して先君の御送骨と那名刀を拙
 僧に授賜りしものなる結願供養の讀經を助聲せられ洪恩徳義何事致
 又これ勝は拙僧這地の來身始より季基公の墳墓のありやせんと思ひて普
 く里人尋問ひ小竟は知るより多りいふうち歎かてのありける小料む善知識の徳
 義小依り御送骨を治りける歎か言ふ物もゆゑ是併我西館の御孝感の致
 せ所拙僧が所以あり先君の件の名刀と拜見せられ我言の錯ると知れぬとい
 はし祖公の名刀と合ひて照文の遺與せし奇談を敬馬く照文の俱はち
 聴く七代士及縁類の片隅小尻をうち掛て在り代四郎まで感嘆せざる者も

宝珠和尚の智慧廣大る未來と知る送囑の趣又星額師の徳詔老實
 共の難し得々と一唱三歎異口同様に一垂時稱えて已さけり當下登崎
 照文の祖公の大刀と受合せて而三番うち戴は七代士もせんを縁類の邊不
 膝を打ち皆共侶これを看る小刀の長二尺の過ぬるその表装の心をけん鐔
 きて三々縮朽され靴糸失て鞆破れも臆々板放ちて内を相る小刀の毫も縮あ
 らざる不寒の稀世の名刀小鍛治が小鳥干將鎧邪が大河龍泉ととも是の優
 きたと思ふ可の鏢十六言の記文ある文依弓馬之力不料所得祖公之刀
 源季基と鑽着てありければの疑へもわらひ皆共侶も嘆賞し照文刀を
 鞆に收めて大法師返してはさる這名刀の來歴口碑も傳へる受あると道徳の
 知のありや七代士連の不知なるべし星額長老の御召れよ卑職総角より時親を
 の輝武の夜話も聴るとありむ先君季基朝臣上毛の御館不在せし比有一日近



名刀名將
 暗小
 狙公と極小



習四五名とて射獵の爲に遊山をめぐり其頭を蕃山の麓に底不知と喚ぶ池
ありて老なる松三株池畔に敏系杖をその樹下に担ぐとや漢子株を臂に懸けて
身單睡俯く在り李基朝臣蕃山より麓馬を找んと過其方を見且玉
ふ事件の漢の頭の上最怖るべ蛇蛇在りその軀の太ふ千載の松に異るる事件の
池より出るる頭松の杪に在りて尾水中に隠れりその長蛇と推て知るべ眼を百
鍊の鏡を雙楯に像く口の血を装り金以ては長舌を舌の火焔然と疑り那漢の
飼の柵猴に駭怖れて逃んとまれ鮮小援れて同搔く程に大蛇を吞れけり然も
大蛇の飽ま又担公を吞んとて那松枝より頭を下りて口を張り舌を吐けり既
つ程に怪む担公の帯をける腰刀忽然と脱出て昇りて事件の大蛇を速り制
めり听んと大蛇のこれ勢ひ撓も松の叢系茂く躰れて出せ他退り刀も亦自然と
返り入りぬ一霎時ありて又大蛇の頭を伸して吞んとまれ腰刀も亦鞋と出て樹
根に閉

ふと始の如し李基朝臣一町あり蕃山の脚に馬を駐りて這前未聞の光景
うち長觀て在りて俱駭に怪む伴當とて若們他とて若們他とて若們他とて
劍の身を衛する素よりその徳ありとのも那漢子の腰刀の就中世に稀る神
宝をそあらしむる然りとて過す惻隱の情を似たりいそ極めてはせんむ
と宜ひをう上挿の獵箭二條抜合て箭路を量り馬を找めりう前刺す
箭の末大蛇の猶も担公を吞んとて又頭を伸き李基透きを彎り固める矢聲を
發て標と射る寬錯るる事件の大蛇の右の眼を比深く射れて一霎時堪む仰る
まよ李基前刺速の燬煉るる二の前大蛇の咽喉を射ると共裏決る窮所の
深瘡を弱と松の杪より撞と隊を死でける担公の响を驚き覺えれ既蛇
毒不觸る舌を強く要立む小程に李基朝臣の伴當とて担公事件のよりを
告知して開が身邊に馬を找り腰附の葉籠る解毒の丹茶を賜り担公の稍

これらへ。と。きかあち。我の復りてその言を听那大蛇の死をえて駭怖れ且然と天々を跪き直せり。小可何か村の朝暮七と喚做る。魯鈍の粗公也。今日近御の御長許。既祈禱招れ祝壽酒の酔されるか。さう這頭を過る程の憶も睡臥けん。余後の言を覺せ尙相の武勇とて極せぬ。あつち。獼猴と喪ふの言を。身の大蛇の腹内を葬らるる。現再生の御恩徳孰の時より報ひまらん。幸ひけりとも。感涙坐す。俯拝し。李其然と。點頭。と。你が死するに。腰刀の奇特を我大蛇と射て殺し。然る後の言を抑。腰刀の世の言。及名物。父祖傳来の什物。然る言。你が買合。其腰刀の世の言。朝暮七と。然し。この親の時より持傳へ。獼猴と儼。命の御恩。小の刀を献り。惜む。李其然。腰刀の世の言。朝暮七と。然し。この親の時より持傳へ。獼猴と儼。命の御恩。小の刀を献り。惜む。李其然。

合せん。宿所。来。と。召。御館。還。程。其頭。過。莊客。有。趣。言。小。件。大蛇。七。骸。那。燒。盡。灰。田圃。肥。效。有。課。儀。の。如。近。村。の。民。胆。洗。て。且。飲。相。武。徳。稱。讚。儀。の。如。昔。の。明。年。田圃。の。實。殊。更。宜。事。の。便。宜。池。水。由。用。水。主。神。あ。れ。村。人。怕。れ。網。を。下。釣。も。夏。の。早。天。の。折。池。水。由。用。水。援。と。要。せ。り。天。池。の。後。人。憚。網。を。植。て。賣。買。を。獵。の。利。を。者。勘。池。の。四。周。水。流。蓮。慈。姑。植。て。賣。買。を。者。あり。又。水。医。田。圃。這。池。援。沃。娘。親。も。鳴。蛙。領。王。の。徳。を。仰。暮。七。の。季。其。朝。臣。の。従。い。ま。る。御。館。へ。参。り。季。其。朝。臣。の。従。い。ま。る。腰。刀。を。令。寄。て。抜。放。り。て。見。ぬ。退。蛇。之。神。刀。の。五。字。の。銘。あり。疑。ふ。も。

猴牽の
影の安
房の里見
重宝
よ白石
先生の筆
記の見え
たるを借
用する官
廳据ある
るべし

取寄仕賃のりとも。即便其刀の價とて。金百兩を令せむ。朝暮七の示すまで。不
飲の望の外に。二期の福德の上。と受戴せむ。直に申す。小可猿猴と大蛇と吞
きて。生活の便着の中。をさうり。と慨き思ひ。いひ。不然。東西と。知さける。刀の價。これ
棠色百枚を賜る。御恩。御恩。と重られ。おん慈悲をひかる。是。ふあ。れ。猴牽。く
枝を生活させむ。とも。且。夕。安。く。老。と。送。り。ん。道。御。慈。善。の。餘。慶。と。も。と。死。家。長。久。御
子孫。敏。目。千。秋。萬。春。萬。々。歳。と。壽。詞。を。囀。り。飲。む。を。稟。し。酒。を。賜。り。前。も。懲
て。老。十二分。醉。と。盡。し。て。退。り。け。朝。暮。七。が。り。の。下。話。を。憊。而。季。基。朝。臣。の。腰
刀の表。装。を。改。め。り。思。ひ。の。隨。造。り。ら。祖。公。と。名。づ。け。ひ。て。愛。玩。一。日。も。帶。め。ば。い。と
る。り。一。季。基。敷。の。ぬ。り。折。祖。公。の。名。刀。も。何。人。の。も。落。ま。け。ん。あ。り。と。も。知。さ。む。り。け。は。を。
瀧田の老。候。二。の。功。臣。杉。倉。堀。内。の。見。覺。た。れ。君。臣。閑。談。の。折。々。不。送。ふ。の。美。を。い。ひ。出。て
いと。惜。ま。ぬ。い。と。と。今。居。る。の。年。と。歷。て。名。と。不。知。る。の。稀。さ。ん。先。君。の。御。送。骨。と。

共。不。件。の。名。刀。の。料。む。も。又。世。不。出。く。正。井。菴。主。の。家。裏。不。る。せ。め。の。一。大。奇。事。之。兩
館。の。丸。飲。び。然。ア。そ。と。推。量。あ。そ。ま。れ。我。們。さ。不。面。目。あり。併。宝。珠。星。額。兩。大。徳。の
賜。り。て。菴。主。の。功。徳。不。及。べ。り。有。々。迄。ま。で。辱。け。妙。造。化。不。と。い。ひ。る。れ。と。一。五。一。と。解。示
去。送。刀。の。束。歴。分。明。な。れ。大。の。飲。ひ。の。は。ち。ら。七。大。士。們。も。信。の。耳。新。心。地。と。て
貌。と。改。め。膝。を。找。め。り。照。文。と。共。侶。不。又。佛。壇。る。先。君。の。送。骨。を。齊。一。梓。と。け。り。當
下。照。文。の。大。法。師。不。商。量。多。く。五。十。金。と。布。施。と。して。星。額。師。弟。不。薦。め。與。る。不。君
侯。父。子。の。ま。の。年。束。施。を。好。ま。ぬ。と。送。骨。送。刀。の。飲。び。を。叮。寧。不。演。る。程。不。大。法
師。も。兩。館。より。寄。ま。ぬ。の。一。經。卷。と。香。奠。を。令。寄。て。俱。不。星。額。長。老。不。贈。り。く。い
や。の。松。僧。一。所。無。任。あり。今。番。故。御。還。の。ゆ。れ。是。等。の。東。西。に。せ。ん。方。る。願。ふ。長
く。貴。院。不。留。め。く。先。君。並。不。先。亡。の。為。不。廻。向。を。做。め。つ。ら。い。く。幸。ひ。る。ん。か。と。憑。む。を
星。額。も。ち。所。て。出。家。の。無。慾。を。心。と。一。鉢。の。齋。一。領。の。衣。饑。を。凍。さ。れ。足。れ。り。と。ま。し。

此れは是等の財宝の拙僧も亦要るれば貴捨とすけの推辭をかり。又思ふより
 あれは姑く與りみえと答て件の五十金を財囊の俵不項不拭。懐不楚と收め又香
 眞と巻軸の両箇の袂見不分ち裏と。徒弟們は通與けり。浩処不小兼屋より三
 四個の小厮們が最大は多々鹿兒二荷不椀家伙までも合納る。蔬菜の晝饌も
 來不ければ代四郎紀二六立迎て庖福不擔ひ入る。合出で主客十一口の法師們と
 照文と七武士これを差め次不代四郎野兵の毎及紀二六以下の伴當も送も
 るくさへ果一六又椀家伙を鹿兒不收めて持して馳て小兼屋の小厮們を返しけり。
 介程不這頭四下る窮民乞丐の昨夜街衢不掲示さす。施のよりと今朝夢知
 して時分と料りと。陸續と、大庵來ぬ者蟻の甘不附く像く幾個とら涯を知
 らる。豫期しるるれば代四郎紀二六兩隊不それ。伴當們不米と料を野兵と錢を
 合さる。不繞不半時許の程不漏さ施したければ。残る錢米の二兩人不合さる可不

る不けり。倍り一程不一個の衰老法師の鼻の損ね足も癩言。竹の杖不携りて。辛辛と
 來不ければ紀二六みづろ立迎て招はせり。左見右見て和尚の脚の不便を詰る。その
 遲りければ。不海を果報あり。施行の目今晝処まで。一兩人分残り。定よりヨメけ
 る。餘さむ合せん。装束あると向ふと衰老法師のち所々。南無阿弥陀佛と造
 化とた方便を不之然ある。是不賜らんと。麻の紉附る。昔深の頭巾と合さる。啓
 くと奴隷があらぬ。残る米と一粒も漏さ。楚と料り入して。錢三四五百文残り。と卒
 とくそ。俵合まれば。衰老法師の笑ひ。不錢も一緒不推勝はて。と拾駝の函あり。去る
 む。不那這とえり。と紀二六詔り聲。苛立て。鈍や。這と巧坊が施して。不受す。不
 くら不疾る。む。と叱る。と冷笑ひて。洒家の左それ右もあれ。刀祢達と疾去。去
 幾まで。不這里不在せる。知む。這城の下る。通坐奇山。逸匹寺の住職と。徳用和尚と
 喚做し。り。あ。今番這里る。庵主が法。延供養。不他們を請り。修る。施の

少えあれ。徳用和尚怒り不給堪む。子院枝寺不徇示。城内一二の権臣も檀越不許
 へ。大勢として推寄り。搦捕んと隊配を信れ。僧俗數百の大敵。今目前不起らん。
 開を避む。敗等。此米薪の上。巢と造る。燕々不似て。愚心魚目をば。あつと慮
 主の施。王達も疾稟。施の報。不告。信り疑ひ。ひそに捨て。又杖不携
 して。脚を曳り。かゝる。怪。と目送る。紀六代四郎。胸安。なから。連立て。そく。芥不
 注進。大照文七。大士。們。不事。信。と告知。ま。大の。所。眉。頻。申。めて。開。る。
 ろ。ぬ。か。約。莫。今。來。會。の。法。延。供。親。我。獨。力。不。做。ま。の。當。城。の。先。主。房。結。城
 氏。首。と。て。嘉。吉。不。陣。殺。の。列。將。士。卒。の。菩。提。の。與。不。ま。る。好。事。と。非。如。那。里。告。も。
 歡。る。筋。筋。る。不。開。と。の。不。罪。と。と。搦。捕。ら。る。と。理。論。は。照。文。七。大。士。們。も。共。信。不
 點頭。大徳の意見。理り。不。不。必。信。の。錯。誤。不。そ。あ。る。ん。と。あ。と。を。星。額。長。老
 推。禁。め。て。ま。る。宣。ひ。そ。善。惡。邪。正。の。君。子。小。人。の。取。る。所。の。用。心。同。く。も。抑。逆。匹。寺。の

住持徳用。便。便。不。と。世。智。不。長。是。と。て。ま。る。佛。学。あ。る。不。あ。る。俗。の。視。聽。を。傾
 る。談。義。説。法。口。才。あり。加。旃。出。家。を。相。応。か。ぬ。武。藝。と。好。ま。て。且。その。筋。力。角。を。も
 拵。く。下。信。れ。む。の。辨。慶。と。も。他。が。右。不。あ。ん。と。か。る。あ。べ。と。人。を。思。う。疲。莫。小。人。の。癖。を
 且。その。仍。状。正。か。ま。常。不。他。宗。と。誹。謗。と。已。不。勝。ま。る。憎。む。と。雖。言。敵。不。異。る。と。也
 ら。れ。當。城。主。の。香。華。院。中。の。地。第。一。の。大。刹。を。七。八。箇。の。子。院。あり。又。十。餘。箇。所。の
 屬。寺。あり。皆。是。同。氣。相。求。る。奸。佞。の。賣。僧。下。風。不。立。く。枝。葉。院。不。住。持。を。これ。ら。の
 故。不。城。内。の。諸。侍。檀。家。勘。を。就。中。結。城。の。家。臣。長。城。枕。之。介。逆。利。堅。名。衆
 司。經。稜。根。生。野。飛。雁。太。素。頼。ま。と。喚。做。ま。三。士。の。先。代。の。家。宰。の。助。を。大。公。執。も
 喜。嘉。吉。の。役。不。戰。殺。の。老。黨。を。結。城。の。家。再。與。の。初。と。他。們。の。職。祿。人。不。超。て。俱。不
 兵。馬。隊。長。の。上。席。を。氣。も。相。似。す。各。字。俗。骨。を。胸。廣。く。取。小。人。を。先。祖。の。忠。義。を
 鼻。不。掛。て。傍。若。衆。人。の。奉。動。多。り。然。れ。件。の。徳。用。と。師。壇。の。交。り。淺。く。不。素。も。暇。あ。る

身を以て狗兒を牽け隼鶻を放ち遊獵と事とら開も飽え共俱に那逸四寺を参詣し住持徳用と武を講し人を誚しと樂とと殘忍を斬心の暴雄をば必徳用を相資けて這方へを打向るるが實に大敵今更にひあふあふねと庵主今番の追薦供養の單に里見殿の丸與るに敢他人を雜へまけ情々の修好といへども慈お施の報條を城下の四巷に布れ故に立地は人不知れて這殃危を醸しより夫寺を造り僧に施まは只是有漏の縁る故に達磨の取らるる処を以てある施の富裕の慈善を以て善愛の義に庶れども又名聞に似たるもあれ時宜ならず用捨を以て憚りある言も施の一事に過て及ぬ各位の千慮の一失後悔を不達ば誠や唐山常言も三十六計走るより最上とまといふおわさるるを立去りあり危に邦に居るうらと利害を談し得失を説く教諭丁寧なれば大家敬慕し開が中にお大法師の沈吟したる頭を拾は感服して長老の示教道理を稱し一切衆生自他平等只結縁を任す

を如來の本願するものぞ救ふ他し施主と討るとは利を謀る是名聞に庶けまご他領に奔と締むる今番の遠已追薦を領主にお告ざりし現松僧が修行の記甚ま死とをり後悔涙るるを照文然とそと慰め難て俱に頭を瘡し大士お意見と尋ね道節勃然と膝を找めて今内々雌々何ぞ按せん畢竟施の一條に我們を思ひ起して薦めし做ましむるに我們七名踏留りて寄る悪魔を刈拂ん登雲崎和殿の庵主俱して各當所を立退めといふと照文咄まを開きわらへるに咱們的和殿達と招會の御使に擇れて偶環會けし今事の危窮に及て縦大徳に俱きとも捨て那里に欲退るに只命運に儘せんものと憚るを信乃に推林示せその議定お理りるれども案内知る敵を留るも退くとも安危に定むるに我們の左まは右まれ大大徳の先君の御遺骨を衛なりある一二の勇士相俱まし心許ると思れり我們義兄弟七名の中一人和殿と俱に退ん推辭するに諫れば照文争ふとを

とある折星額師弟とて長老今番の好意の千萬言の殺年か。縁場其異日亦再會の折もいん聞諍の側杖打れんとて退りあり。と云ふ星額うち听て否。拙僧もうち置り寄隊近つる立迎て和解せし事と相計ん。亦出家の役なれと云ふ。大い點頭て又道即們の向いてはまふねも好まへん。傷りぬそ一個も敵も殺さば日屬の作善空とて自他の功德と喪んぬの事を忘れぬと論せ道節うち笑ひてその亦を理を軍令る哉兵を原是凶器なり。今大敵と戦ん殺さて克ん令んぬ最做く死所ゆる。近曾大江親兵衛が武功を傳ふる富山も館山も幾千百の党と一個も殺さ降伏する例もあれ。左も右もせんとを井介推林めてその我咱們的肯いかり。何と云れ人の各ゆるるあり。ゆるるあり大江仁字の玉の應とてその性仁恕るん。他が仁慈小及ぶとて又立優る所もあらん非如教違ふも饒りぬとて陪話れ小文吾現大角も共信ふ。

笑局入りて宜是はのれり。出家の出家の作りの武士の武士の進退あり。聞戦の方の只我れら任してとて退りぬるか。と其合照文代四郎及大士們も不服とて脱て袂見の裏に照文の伴當の腰刀とて身固めぬ。纏臈看現戦世の沿習とて徳折も武を磨く準備も脱落るけり。浩処も兩個の親兵を城下の方より来て七武士の報る。小可們の指揮に従て那這と徘徊ある敵の虚実を張ひひの勢二三百もの大将とわがねら狩場將東中騎馬も綾蒲公立と載て公前を馳ひ弓を推り甲乙二騎ひん開が伴當おのり二三十名も過ぬゆに他の半纏脚絆も列卒繩桿棒も引提り。餘の猛可の驅催する土兵もあらん。敗る武具を着るものもあらん。交て竹槍或の連枷も推るがらう。既も屯ち立られ推寄ん工程あべ。御小心いへと言語急迫は注進を、大法師もうち听てあらん。拙僧も衆議のま。



達れて里見の士五十二名來會と風聲あり巷談より施の報條の證據
あれ紛れる早く領主訴へ理非と糾明せむ何ぞの後の懲り武門の
恥辱佛家の瑕瑾勿諸の各這美と思ひと席と拍々言ふ本山侍
者より祿釋坊堅削と喚做と惡僧衆議の突然と杖と出で答る現
御鬱憤の喜の趣道理至極の然る兵書の中兵と是拙速の責ふとの
あその計巧人も久し佳と甚介を今も長詮議しとの説を領主訴五
つ憶むも時日移り他們他御走るも常言の聞諍果ての棒之味
世の胡慮するの因て情地と思量る幸ひなる本山の檀越なる堅名根生野
兵頭追鳥獵の與ふ今朝未明より城と出て程遠く野邊不在の苦た
者のいへ弟子隨便人として那毎より告ぐ快來會と請ふ時を程さむ
下御商量いかに詞を託し結城の家臣とせざる堅名衆司經稜根生

野飛鷹太素頼の堅削が招きよ伴當列卒と相俱と鶴と駕狗を牽く
獲束の儘く野邊より這果來よけれ徳用後斜を馳て堅削の迎へ
申議の席の招きよ經稜と素頼の伴當列卒の内住めを儘堅削の
引を徳用對面の子院屬院の法師の席と譲り上坐の請薦め寒暖と舒
恙るを祝け登時住持徳用の失の口誼の果るとは經稜素頼の向
いく件の支の趣と辯舌尖鋭く演知する両士の听け推禁めてその美の衛高祿
釋坊より告られかあるる因て伴當吩咐て巷頭の風聞と揚る安房の
里見の兵毎が那頭陀大い誘されて今番の法事と執り本との車下口既と紛る
縦その責実とも嘉吉の戦死の列將士卒の菩提の與る法會ふらと我君
侯の告稟と已前免許を請奉るべく當寺へも恁々と示し七帮助と請ふ
該之介もその美不及りけ他們が鳥許の奉勤の饒生と糸も今も告

経稜素頼ハ俱々然りと云々の受咱們的不用意ゆく従ふ親兵あつたは這
より一々程遠くぬ莊客們的拘示して猛可ハ土兵を駈催しつれば時を待
さぐ威多るべし是ハ本山内外の法師武者と加まれば既ハ四隊の雄兵あり却又
那里の法會を連る里見の士卒ハ二十餘名その他餘の庵主と資けぬ所出処不
定の禿驢の其も十人ハ過むとほるを躬方の多勢とてハ八方より捕
稠々那奴們萬夫の勇ありとも捕漏さるとぞと喘るハ徳用推禁を开ハ
勿論の正まがら事ハ成かかるとも洩易くハ非除里見の士卒們を送る捕
るとも似而非頭陀、大と走らしめ後々までの送恨るるや今愚意とて
せん堅名主根生野主ハ土兵と相率く本街頭より推寄り又堅前是
副とて子院屬寺の衆徒道人と半分ハその隊ハ相俱し宜く先鋒ハ
找むし又長城主の隊兵と領て間道より先ハ找むし他們ハ敗れて走ん折開

去向を捕稠く刺扱とて敷きぬ漏さるもは但し武井の這方ハ岐路あり正
路ハ関宿より木下風行徳小到るハ開岐路ハ江戸へ下流へ又拙僧ハ當寺の
所化と道人們を従へ長城主と共侶ハ情地ハ先へち出て那岐路ハ敵をせん
武井諸川の這方ハ知るべく細流より下流ハ利根河ハ相通ハ関宿より
兩流の一箇ハ松戸新宿より別れて戸田河と做ると有徳ハ去向ハ津も
案内の敵るれハ進退不便推て知るハあのみ誰何と云ふ合る像ハ鼻蠢
あハ解示せば大家理ありと稱えたる中ハ長崎惴利ハ件の一談をうち聴て通愛
たは長老の説法死るぬ躬方ハ引導ハその圖ハ當と精妙ハ咱們的初度の隊ハ
會つて伏兵あるんハ勇士の本意あるれども現ハ二の隊ハ大事るれ咱身ハ既ハ
準備して親兵を送るべく來あければ持せ火銃よりあり敵ハ援の兵ハ來
備ふ餘ハ敷き付さんハ是もあろう安んばしと噪るハ蒼髯撥拍ハ皆憑く

思ひ却酒盃と行替り。云云と相譚ふ折。這近郊る莊客門の堅名
經稜根生野素頼が催促に従ふ。走聚る者二百餘名。少く連加捍棒
長柄の鎌と推り。既小當寺を來ふけり。そのつえわのけ。大家の勢ひ腐て
卒然く快打立と。徳用堅削衆徒道人準備の身甲餘杉介の各
臂縛脛衣の身探り。器械と皆傷引着て俱小部と聞く程。本山の先住を
け。未得と喚ばせ老僧の齡。既八十有餘年來隱居と。山内の別院に在り
今の一談と人傳ふ。知り。より。盛馬にて一霎時の堪。二個の行童。杖掖
見とて。來つ住持徳用。向て。涙と共諫る。少く。他郷の行脚の法師が當
城外の古戰場。中。嘉吉の陣。列將士卒の菩提の與。小。と。念。佛。供。養
施の義を先找寺へ告示。非除帮助と請。れ。と。并。に。於。此。に。於。る。人。の。好。事
醋。と。屬。院。の。衆。徒。と。召。聚。會。武。家。の。檀。那。告。譚。て。出。家。人。の。相。心。と。ぬ。殺

伐の設。及。び。飲。天。魔。鬼。の。障。身。と。謂。べ。且。法。會。の。願。主。大。と。や。ら。ん。安。房。の。里。見。は。舊
臣。之。故。主。代。り。供。養。は。は。れ。里。見。の。家。臣。の。幾。名。飲。東。會。目。多。と。ゆ。え。り。嘉。吉。の。ひ
か。笠。城。せ。れ。御。方。の。列。將。多。し。中。の。那。里。見。季。基。主。我。先。館。氏。朝。朝。臣。と。莫。逆。の
信。友。也。そ。の。忠。を。義。甲。ひ。し。り。れ。當。館。城。朝。朝。臣。城。邑。再。與。の。初。嘉。吉。の。戰。歿。の
列。將。義。士。の。菩。提。の。與。石。造。の。地。藏。菩。薩。と。建。立。せ。り。身。中。の。殊。兩。多。大。佛。一。體。を
季。基。王。の。誓。表。と。定。ま。せ。り。世。に。知。る。人。稀。也。我。任。職。の。折。し。て。當。寺。の。誓。記。を
紛。れ。る。有。徳。の。件。の。法。慈。獨。里。見。殿。の。與。の。ま。り。先。館。氏。朝。朝。臣。並。御。方。の。列
將。士。卒。の。菩。提。と。自。他。平。等。多。く。法。會。の。由。り。那。里。義。を。當。館。外。へ。訴
ま。る。も。愛。懽。せ。ら。る。ん。何。ぞ。追。捕。の。沙。汰。あ。ん。や。こ。の。う。又。根。生。野。們。二。個。の。武。士。の。ち
り。向。て。各。位。格。另。ら。素。より。道。理。の。兩。箇。の。那。里。義。と。思。ひ。館。訴。言。下。て
て。下。知。依。り。あ。ん。私。の。設。と。言。と。七。式。の。土。兵。を。駈。催。或。僧。侶。の。帮。助。借



緝捕の準備何事ぞや。忠中もあまを義の道に傲慢の吉幸免るる。思ふに
ねと。這方と禁め。那方と宥め。理の切なる老僧の禁言口も苦けれ。狂馬の鞭る像く。い
ゆる怒る。経後素頼。惻利も亦共保。權威も兼て。聲もひたり。今なるの言和僧の听んや
慈悲忍辱の佛意でも。邦々知の法度あり。武士の武士の務め。の壁言。那奴們言。設て
我先君の菩提を。も吊奉るといふも。人の憑まぬ法會。三昧。迺是我君と。蔑如。不
非礼の校槍許さる。鳥許る言と。罵れば。然と。點頭。徳用。堅削。俱の腕と。振り
三檀越の言道理の稱。當君。曩の季。其們が。義列の。戦。致。と。憐。み。ひて。其。基。標。と。建。立
あり。折。其。義。と。安。房。告。れ。き。そ。他。が。領。地。の。建。一。の。あ。ら。ね。今。番。他。們。が。這。地。の。子。館。の
免許を。稟。請。さ。法。慈。施。の。同。か。毛。乱。れ。る。世。の。出。家。も。弥。陀。の。利。劍。と。頭。の。髻。で。天
子。將。軍。圍。守。領。主。與。不。兌。徒。之。女。拂。ひ。ぬ。山。門。の。大。衆。南。京。法。師。先。例。の。多。く。あり。迂。遠
る。似。而。非。談。義。不。時。後。れ。悔。む。ら。敵。も。小。く。立。た。ぬ。と。打。斬。鎧。の。あ。ら。と。拂。ひ

三士の勢の執鳥鳥の像の大家立の身と起き猶禁んと推れも堰留難水も座子劍
降下脩羅降の老を得心る悪僧俗が未得を檢遣り推隔て皆散動る外面も遅
老と若と着る長城が殿兵莊客們及堅名と根生野の伴當列卒們送る。去。園。近。二。側
存整として星列れ。三士に信と相且て事終ると言示せ。大家。都。て。あ。ら。ぬ。け。そ。中。小。近
如多。莊客。每。秋。を。料。ら。ぬ。緝捕。古。戦。場。る。庵。中。念。佛。供。親。不。施。行。慶。に。那。大。願。主
大坊及來會の士卒の漏る。搦捕。欲。さ。う。と。愛。不。隆。て。空。知。り。且。敬。馬。足。目。を
注。さ。る。言。出。さ。ば。然。り。と。思。ひ。催。促。不。儘。一。俱。不。來。る。鈍。さ。悔。む。を。さ。ら。ぬ。勢。の。既。の
あ。ら。ぬ。脱。る。く。も。あ。ら。ぬ。己。工。の。從。ふ。め。ら。躬。方。の。心。一。致。せ。ら。ぬ。知。恩。價。の。意。を。教。へ。法。師
武者。道。人。支。部。も。勇。む。去。向。の。進。退。皆。三。門。を。出。て。馳。て。經。後。素。頼。惻。利。各。馬。も。ち。踏。り
二。隊。も。ち。一。條。路。も。暗。蹄。と。定。め。期。の。約。り。小。敵。と。見。て。侮。り。思。那。僧。俗。の。送。り。捕。漏
き。と。さ。ら。ぬ。這。段。の。月。長。き。を。れ。ぬ。楮。數。言。不。定。限。あ。れ。作。者。の。自。由。成。か。ま。り。姑。且

筆と較ぶるの事。畢竟結城の三士。竹無僧。徳用。堅削。と共侶。大並。七士。と稱捕。欲
 考。この日。勝負。甚。麻。を。開。又。卷。を。改。め。て。本。輯。下。帙。の。中。に。首。の。解。分。と。聽。ね。か。し。
 作者云々の第九輯の始の腹稿より。卷の數いと多くるを。て。上。中。下。三。帙。に。相。分。ち。
 又。帙。を。毎。上。下。の。二。つ。に。分。ち。て。九。六。に。出。し。し。本。帙。の。首。卷。十。三。之。多。の。附。言。の。既。に。如。し。
 就中這第百二十五回の説く。処。七。大。士。が。憶。り。る。又。厄。の。あ。り。殖。の。あ。り。を。
 后。ま。で。い。ま。の。解。分。を。看。官。思。ひ。感。へ。て。今。整。ふ。に。筆。と。較。ぶ。る。事。
 ぬ。え。唯。看。官。の。送。城。の。事。を。作者の本意。わ。ね。る。本。帙。の。限。る。あ。り。
 後。の。看。送。の。事。も。後。の。樂。々。か。く。綴。り。送。さ。る。長。々。の。筆。の。劣。を。省。ふ。よ。う。
 ぬ。然。ハ。只。の。五。卷。を。看。る。第。百。十。五。回。上。更。劣。り。け。り。の。わ。君。子。の。糠。を。舂。
 了。糟。の。と。り。知。ら。ぬ。龍。を。臨。む。蜀。の。富。る。と。思。ひ。け。る。儔。る。べ。し。
 南總里見八犬傳第九輯卷之十八終

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙上画工筆工刷人目次

出像畫工

柳川重信



淨書筆工

十三四之卷	十七之卷	谷	金	川
十五之卷	十八之卷	横	田	守
十六之卷	並補遺	櫻	木	吉
		鳥	山	某

南總里見八犬傳全輯

九九輯一百四十餘回全部七十有餘卷
右來丁酉年刊列全備仕候 每輯左の如し

第一輯	五卷	第一回より	發端結城落城義実安房の流寓神餘粟金礎考の本輯あり
第二輯	五卷	第二回より	山下定包伏誅滿呂安西の倉房大並伏姫富士の本輯あり
第三輯	五卷	第三回より	信乃額藏道節現公の世渡り大塚塚芳流園の段の本輯あり
第四輯	四卷	第四回より	芳流園の後段行徳の段小文吾親兵衛出世大塚の後段庚申塚の段の本輯あり
第五輯	六卷	第五回より	市河の段雷電山明魏山荒芽の段大段五夫集音音夫婦親子姉妹の本輯あり
第六輯	六卷	第六回より	荒芽の後段朝谷村並右邊の段毛野入世對立博摩山壁返の段の本輯あり
第七輯	七卷	第七回より	庚申山赤岩壁返後の段甲斐の穴山様石段指月院の段の本輯あり
第八輯	七卷	第八回より	二村の閉牛小倉宿片貝の館誡訪湖並青柳客店の段の本輯あり
第九輯	七卷	第九回より	大田大川が再厄の段穗北の段湯嶋の社頭の段司馬濱の段の本輯あり
第十輯	六卷	第十回より	鈴の森大坂大山復雙の段安房の稻村の城の段素藤の段再出世本輯あり

八犬傳九輯卷十八

六五

文政英堂藏

第九輯中帙上七卷 第四百四回より 富山の後の段館山の城の段人不出の段濱路姫の親共衛遠言る段本輯あり

第九輯下帙上五卷 第四百十六回より 不忍池の段河原の段素藤の伏誅結城古戦場の段本輯あり

第九輯下帙中五卷 第四百十六回より 是より下の作者の稿本いまだ成りきり故にその趣を注し置かれり中下二帙の

第九輯下帙下五卷 第四百十六回より 卷の數も回数も日本と異なるものあり過不及あるものあり明年改定を録すべし

右八大傳全部七十餘巻二百四十餘回明年刊列満尾仕ひり並製本羊紙揃りの外は賜願の君子の御託に儘しなむの雁皮紙揃りより大抵一輯一帙分を合巻二冊に製本仕ひり九輯全部十三冊は可成り充つた遠國御進物或は御旅の折或は湯治場など御携りおひ道中炭張りとして至極の御便利なりといふ並製本も第一輯より六七輯まで刺画の落墨板紛失致し標弁並は帙袋の模様板の磨滅及びゆい先般悉彫り改むる製本孰も新板詰具出りの折の如く高毛も疎累多し折々揃廻し毎輯品はれ多し扱仕入置の同本房並は向寄の書肆より多少は依りてお水めりて改むる世に物の本もより改來の大部類多し春目林夜の御慰もよりあるか極書林文漢堂敬白

近世説美少年録第四集

第一集より第三輯三十回までハ既に刊行しりぬ

開卷驚奇俠客傳第五集

第四集二十回より四十回まで五巻續出遠くはるべし

莊蝶翁再遊外紀第一集

胡蝶物語前後二編今を再世に刊行す

著作堂一夕話大本五巻

本阜吾中山中一夕話の書ゆりといふものあり戲里おのぞ翁の隨筆を初学の爲に裨益を多し近刻

曲亭翁精著八大傳の二書第八輯より下九輯の下帙を本房刊布の蔵板を之餘浪花を三書肆の所蔵をいしと客歳未の冬十二月第一輯の第七輯まで蔵板を彼外も購ひては全部不致本房の蔵板を成りひた依之その多板のちり失ふと補刻仕り製本して初のごく美本仕ひり木刻の新書目録の右演をさかしく本房必明年の結局大團山に至りての年より彫鐫の工の果しむるまで又美少年録第四集との餘も右の目録をわすれ翁の新編間影多し毎年刊行仕ひり四方遠近億兆のみむ君する風をさしめ求めざるべしとてかこつねなるの 大江刊行の書林 文漢堂再白

○家傳神女湯 婦人ちのみち 一包代 百銅
○精製奇應丸 大包代 金貳朱 中包を五カ
○熊胆黑九子 ちのけをりて九カ 一包代五カ
○婦人びりの如神藥 ちのけをりて九カ 一包代五カ
○製藥本家 四谷善の坂東側 目録付 龍澤氏 弘所 元福町中坂下南側四方み七店の向 ちのけ氏

天保八年丁酉年春正月吉日辰發行

大阪

書行

江戸

河内屋長兵衛

河内屋茂兵衛

丁子屋平兵衛板

八才作才車六十八

書評

五

大

同

小書評四三

下子呈平共滿

內呈共滿

內呈共滿

天弘八年丁酉年春五日吉

天弘八年丁酉年春五日吉... 書評... 大... 同... 小書評四三... 下子呈平共滿... 內呈共滿... 內呈共滿... 天弘八年丁酉年春五日吉... 書評... 大... 同... 小書評四三... 下子呈平共滿... 內呈共滿... 內呈共滿... 天弘八年丁酉年春五日吉...

